

# 梔子豉湯

西 勝久

出典 傷寒論 : 太陽病、陽明病、厥陰病

金匱要略 : 嘔吐噦下痢病

## 条文 太陽病中編

- 1 発汗、吐下の後、虚煩、眠るを得ず、もし劇しき者は、必ず反覆てん倒、心中懊憹す、梔子豉湯これを主る。もし少気の者は、梔子甘草豉湯之を主る。もし嘔する者は、梔子生姜豉湯之を主る。
- 2 発汗若しくは之を下し、しかして煩熱し、胸中窒る者は、梔子豉湯之を主る。傷寒五六日、大いに之を下して後、未熱去らず、心中結痛の者は、未だ解せんと欲せざるなり、梔子豉湯之を主る。

## 陽明病

- 3 陽明病、脈浮にして緊、咽燥き、口苦く、腹満して喘し、発熱汗出で、悪寒せず、反って悪熱し、身重し。もし汗を発すれば則ち躁しく、心かいかいとして反って譫語す。もし温針加うれば、必ずじゅつつき、煩躁して、眠るを得ず。もし之を下せば則ち胃中空虚、客气膈を動かし、心中懊憹、舌上胎の者は梔子豉湯之を主る。もし渴して飲まんと欲し、口乾舌燥の者は、白虎加人参湯之を主る。もし渴して水を飲まんと欲し、小便不利の者は、猪苓湯之を主る。
- 4 陽明病、之を下し、其の外熱有り、手足温、心中懊憹、飢えて食する能わず、ただ頭汗出ざる者は、梔子豉湯之を主る。

## 厥陰病

- 5 下痢の後、さらに煩し、之を按じて心下濡の者は、虚煩をなすなり、梔子豉湯に宜し。

## 金匱要略

### 嘔吐噦下痢病の脈証と治

- 6 下痢の後、さらに煩し、之を按じて心下濡の者は、虚煩となすなり、梔子豉湯之を主る。

## 処方構成 山梔子 3、香豉 4

山梔子 : 清熱瀉火、涼血解毒

- 心煩を主治し、身熱、発黄を兼治す。(薬徴)
- 味苦寒。胸心大小腸の大熱、心中煩悶を療し、小便を通じ、五種の黄病を解し、病を治し、労復を起こす。よく熱を解し、煩を除く。その性軽へう、大黄の質実苦寒の比にあらず。これをもって、その主る所多く汗吐下もしくは労復の後にあり。(古方薬議)

香豉 : 解表、除煩

- 心中懊憹を主治し、心中結痛及び心中満して煩するを兼治する。(薬徴)
- 味苦寒。煩躁、満悶を主り、氣を下し、中を調べ、毒薬に中るを治し、並びに犬咬を治す。気味香美にしてしかして濃、よく胸中に滞れんし、もって煩満懊憹を除く。故に、しし諸湯、ことにこのものを配してもって掃胸の績を奏するなり。(古方薬議)

煎じ方 : 梔子豉湯

右二味、水4升をもって、まず梔子を煮て、二升半を得、豉をいれ煮て一升半を取り、かすを去り、分かちて二服と為し、一服を温進す。吐を得る者は、後服を止む。

## 関連処方 山梔子と香豉

梔子甘草豉湯：梔子豉湯証にして、急迫するものを治す。（類聚方広義）

少気：氣息微微、まさに絶せんとするさま。

氣力乏しき者（原南洋：古方慢筆）

梔子豉湯の症にして、少気する者を主治す。少気と短気と似たり、氣急促迫を短気といひ、氣息吸吸絶せんとするが如きを少気というなり。

（中村元恒：古方標的）

梔子生姜豉湯：梔子豉湯証にして、嘔するものを治す。（類聚方広義）

梔子豉湯証にして、嘔する者を主治す、梔子豉湯は、吐剤とする方に、今嘔あるを、生姜を加えてこれを制するは、吐剤に非るに似たり、これ暫くその嘔を制して、??を胃に納めしむるなり（中村元恒：古方標的）

枳実梔子豉湯：梔子豉湯証にして、胸滿するものを治す。（類聚方広義）

およそ、大病新たに差え、血氣いまだ復さざるにあたり、労働飲たん度を過ごせば、すなわち或いは心胸滿悶をなし、或いは煩熱を作す。この方を与え、將養すればすなわち癒ゆ。もし、大便通ぜず、宿食あるものは、枳実梔子大黃豉湯によろし。

枳実梔子大黃豉湯：枳実梔子豉湯証にして、大便閉するものを治す。（類聚方広義）

## 条文解釈

○1について 大塚敬節：虚煩：下痢ののち、更に煩し、之を按じて、心下濡なる者は虚煩となすとあり、実煩に対する虚煩であり、実煩では腹部が充実しているが、虚煩では心下軟弱である。発汗吐下後に起こったのである。反覆てん倒：あちこちと寝返りを繰り返すこと。心中懊憹：胸中が何とも形容しがたいように苦しい。成無己は、「心中鬱鬱然として、のびず、かいかい然として、いかんともするなく、之を煩悶に比して甚だしき者は懊憹なり」。少気：呼吸浅表。短気は呼吸促迫で、少気は、深い呼吸ができないのをいう。

煩して心中懊憹する者は、内実の証にまぎわらしい。故に虚煩といて、これとの区別をあきらかにし、あとで出てくる大陷胸証の心中懊憹して結こうするものとの別を示している。

心中懊憹して腹滿、便秘があれば承氣湯類

心下部硬く、呼吸促迫して、心中懊憹する者は大陷胸湯

虚勞、虚煩、眠るを得ず、熱状なしは酸棗仁湯（梔子剤は熱状あり）

五苓散、猪苓湯にも眠るを得ずあり

○2について 大塚敬節：汗下の後、病邪解せずして、煩熱、胸中ふさがる状に至った。

奥田謙三：ふさがるは、余邪胸中において、止まって発動せず。故に懊憹するに至らざるなり。

これ前章の一変証に過ぎざるなり。故に梔子豉湯の主治となす。

○3について 大塚敬節：三陽の合病を誤治した場合の条文。

脈浮にして、緊——太陽病、咽燥口苦——少陽病、腹滿して喘し、発熱汗出で悪寒せず、かえって悪熱し、身重し——陽明病。

誤って発汗 精神状態が錯乱、さわがしくなり、うわごとをいう。（調胃承氣湯）

誤って温針で発汗 不安になって、びくびくと恐れおののき、もだえて、不眠（桂枝甘草竜骨牡蛎湯）

誤って下すと胃に実の邪はなくなるが、虚気が胸中をゆすぶり、なんとも形容しがたい、胸がふさがったような苦しみを訴える。（梔子豉湯）

○4について 大塚敬節：陽明病を下し、心中懊憹して、煩し、胃中燥しあるものは大承気湯を用いる  
「陽明病、下之、心中懊憹而煩、胃中燥し者、宜大承気湯」

今回の○4の条文では、燥しの記載なしなので大承気湯ではない。陽明病で下したところ、前からあった身熱がとりきれず残っている。しかし、手足は温であるから、表熱裏寒ではない。燥しがあれば、頭汗があるはずはなく、手足濇然として（熱熱としての誤り？）汗出するはずである。ここでは、くだしたため、胃中空虚の気が上に迫って、頭汗となった。よって、梔子豉湯は、身熱があって、心中懊憹し、飢えて食する能わず、ただ頭汗の出ずるものを目標とすることがある。

○5について 奥田謙三：この章は、また直ちに前章の下痢して譫語する者は燥し有るなりをうけて  
（下痢譫語者、有燥し也、宜小承気湯。）、その下痢止みて後、更に煩し、之を按じて心下濡なる  
者を挙げ、以て梔子豉湯の治を論ずるなり。承気湯を与えて、下痢すでに止むものあり。下痢止むと  
いえども、元来有りし所の微煩、更に甚だしきを加ふ。下痢止みて後、更に煩するは尚宿帯の心下に  
残れるやの疑起ころん。故にその然らざるを証せん為に、之を按じて心下濡なる者と言う。濡とは軟  
弱の謂也。今、更に煩し、之を按じて心下濡なる者は、通利によって、燥し除き、その結果、いささ  
か裏虚し、余邪逆して胸中にふさがるとの致す所也。

○6について 大塚敬節：濡とは、水を含んでやわらかくなるということ。「吐を得ればすなわち止む」とあるが、吐剤ではない。

#### 処方解釈 心中懊憹

胸の中が何とも形容できないように、もやもやとして気持ち悪くさっぱりしない状態で、胸中塞がるとは、胸のつまること、心中結痛はむすばれ痛むということ。（大塚敬節：症候による漢方診療の実際）

鬱悶のびざる貌、煩躁にて異なるなり。ていちゅう——なやむ、もだえる、こつとつ  
（浅田宗伯：傷寒雑病弁証）

尾台榕堂：発汗、吐下の後云々の章は、この方の主症なり。

陽明病、脈浮にして緊、咽燥き——陽明病から悪熱し身重くまでは、白虎湯症、もし発汗しから譫語すまでは大承気湯症、もし焼針からじゅつてき、煩躁して眠るを得ずは、桂枝甘草龍骨牡蛎湯を用いる、もしこれを下し、心中懊憹し舌上胎ある者までは梔子豉湯。虚煩の字は最も味あり。之を按じて心下濡は、中に阻滞する無きを知るべし。この方吐剤にあらざるなり。嘔するものには生姜を加える。（類聚方広義）

矢数道明：虚証に属するもので、胸中に気が塞がって、心中懊憹するもの。心中の懊憹と身熱とが目標である。すなわち、心胸中に憂悶の感があって、いかんとも名伏しがたい状態である。しばしば不眠を訴える。身熱というのは悪寒をとまわず、身体に熱感を覚えることで、体温の上昇はなくともよい。また、身体の一部に限局されてもよいもので、たとえば手足、顔面もしくは肛門の周囲にだけ訴えることもある。心窩部は堅硬膨満というほどのことはなく、またそれほど軟弱でもない。

龍野一雄：胸中煩熱：胸から心下にかけて塞がる感じ、懊憹、疼痛等を訴える。それに伴う身熱、頭汗、不眠などの虚煩症状を治す。小柴胡湯は、胸の実熱で、心煩、胸痛を起こすが、梔子豉湯とは胸熱は共通でも虚実の違いがある。従って小柴胡湯証にて虚証のものに使うと思えばだいたいにおいて、本方証がつかめるであろう。ただし、本方証の胸部症状は劇しいことが多い。

胸部症状：心中懊憹、心中結痛、心かいかい、胸中窒、喘

神経症状：不得眠、譫語、煩、煩躁

腹部症状：腹滿、胃中空虚、客气動膈、不結胸、心下濡、飢不能食、口苦、舌上

胎体症状：身熱、惡熱、煩熱躁、煩躁、じゅつてき、反覆てん倒、身重、頭汗、手足温

熱症状：虚煩、煩熱、煩躁、外熱、咽燥

これらの症状は同時に同じ強さで数種のものが現れることもあれば、たった一つが特に著明で主訴になっていることもあるが、組み合わせられて現れるにしても決してでたらめでなく必然さをもって、組み合わせられて現れる。これは一言にして尽くせば虚性の心熱となる。或いは上焦の虚熱、或いは正気の虚、邪気の実、或いは水液かつ乏し熱心に迫るといってもよい。神経症状や体症状などはこれを基としておこる関係症状だが、前述したのは傷寒の熱病だから胸熱症状が主だが、雑病では神経症状や体症状の方が主になり、胸熱は原因として推定するに止まるような場合もある。本方証は熱病の治療中に現れる。自然経過中、服薬後、誤治などいろいろな場合にみられる。使い方は条文に従うべきだ。（漢方入門講座）

不眠症、出血、かゆみ、胃痛、口内炎、食道狭窄、黄疸などに応用

大塚敬節：梔子豉湯は、梔子と香豉の2味からできた方剤であるが、香豉をいれなくて、梔子だけで、食道ポリープや食道炎を治した例がある。また梔子を主薬にした利膈湯は食道癌による嚥下困難に有効である。傷寒論では、梔子豉湯を心中懊憹するものに用い、胸中ふさがるものに用い、心中結痛するものに用いている。心中懊憹とは、胸の中が何とも形容できないように、もやもやとして気持ち悪くさっぱりしない状態で、胸中ふさがるとは、胸のつまること、心中結痛はむすばれ痛むということで、梔子は、つかむように痛むというところへも用いる。――中略――梔子甘草豉湯という処方は、梔子豉湯に甘草を加えたもので、急性肺炎の時に起こった呼吸浅表を伴う胸痛に著効を得たことがある。

（症候による漢方診療の実際）

中村元恒：古方標的：心中懊憹して、身熱ある者を主治す。これ瓜蒂散の症に似たり。しかれども、瓜蒂散は、胸中に物有るものに、これ（梔子豉湯）は、胸中に物なし、故に虚煩と名付く、また桂枝甘草に似たり、しかれども、彼は按すことを好みて熱なし、これ（梔子豉湯）は按すことを好まずして、熱有り、熱ありといへども、舌上に胎なし、胎あるときは小柴胡湯に、梔子豉湯も？少陽に属するときは、もし表症ありても、決して発汗すべからず、しかれども胃実の症を兼ねることあるときは、まず承気を以てす。これ小柴胡に異なる故に、あらかじめ心得べきことに――

大家の治験：別紙参照

## 〔加減〕

梔子甘草鼓湯。梔子鼓湯に甘草二・〇を加えた方劑で、梔子鼓湯の証で、急迫の状のあるもの、たとえば呼吸浅表のもの、掻痒の激しいものなどに用いる。

梔子生姜鼓湯。梔子鼓湯に生姜四・〇（乾生姜は一・五）を加えたもので、梔子鼓湯の証に嘔吐の状あるものに用いる。

## 〔治例〕

## (一) 子宮出血

村民金五郎の妻、年廿五歳。子宮出血が数日続き、全身倦怠・心煩・微熱、諸薬を服するも効がなかった。梔子鼓湯二貼を与えると出血は半減し、更に数貼を与えて全治した。

## (二) 子宮出血

岳母某が転んで腰を打ち、その後子宮出血が続いて下腹が軽く痛いという。いろいろの薬をのんだが効がないという。余が思うに、この病は転倒して驚き<sup>おそ</sup>愕れて起こつたものである。そこで梔子鼓湯を数貼与えたところ、それですっかり治った。

## (三) 衄血

月洞老妃、年七十余。鼻血がどンドン出で、止血の薬をいろいろのんだが効かない。余はその様子を訊いてみると、どうも虚煩（衰弱していて神経が興奮している）の状がある。よって梔子鼓湯を作つて与えたところ、すぐよくなった。

（以上三例は腹証奇覽、松川世徳の治験）

## (四) 肛門瘙痒

五七歳の男子。痔核の手術を三回うけたが、そのあとで肛門の周囲がかゆくなった。夜はそのため眠れない

という。身熱、虚煩眠るを得ず。心中懊惱等の傷寒論の条文にヒントを得て、梔子甘草鼓湯を与えたが、三週間で全快した。

（大塚敬節氏、漢方診療三十年）

## (五) 食道炎

私自身が焼きたての熱い餅を急いで食べたので、食道を痛めて困つた。食道に火傷を起こしたのであろう。胸中のふさがるもの、心中の結痛するものということから、梔子鼓湯を思いつき、香鼓がないので、山梔子と甘草二味を煎じて一服のむと著効があり、そのすばらしさに驚いた。

（大塚敬節氏、漢方診療三十年）

## (六) 急性肺炎

四九歳の婦人。四〇度を越える高熱が数日続き、脳症を發して譫語狂乱の状を呈した。患者の訴えるところによれば、胸が苦しい、胸部正中線から、右乳下部にかけて苦しい。見ていると咳嗽がある。喀痰はさび色である。舌には厚い褐色の苔があり、それほど乾燥していない。脈は沈で遅のようである。腹は右季肋心下に抵抗を触れ、圧すと苦悶し、咳嗽を誘發する。右胸全面濁音で、大小水泡音を聴取する。大葉性肺炎である。

柴胡桂枝湯に、桃核承氣湯を小服兼用したが、好転しない。翌日往診してみると口渴がある。一刻も水を離せない。苦しい息づかいで、呼吸性呼吸困難ともいふべきものである。すなわち呼吸することとクックツと異様な音声をたて、煩躁悶乱の状である。顔面は紅潮し、胸全体がいうにいわれず苦しいという。体温は三九度であった。

## 湯 鼓 子 梔

「発汗吐下の後、虚煩眠を得ず、反覆顛倒、心中懊惱」「急迫の状」であるので、大塚敬節氏の助言によつて、梔子甘草鼓湯を与えたところ、服後時余にして粘痰が音もなく流れ出し、解熱、食欲出で、咳嗽も著しく好転し、数日にして全治した。

（著者治験、漢方百話）